して血行が悪くなり、局所的に新血が巡らず、毛髪が栄養されないため脱毛する。

② 眼（目）の望診

五臓六腑の精気はすべて目に注ぎ、肝の経脈は目に連絡して、目は肝血の滋養を受ける。したがって、目は肝の機能と五臓六腑の状態を反映する。

肝の機能は目の全体望診で判断し、臓腑の状態は目の症状や局所望診で判断する。

❶目の全体望診（図 2-7）

大きさには肝気の強さが現れ、目尻の方向には肝胆経の気血が反映される。

ⓐ大きい目

肝気が盛んな傾向があり、心窩部が膨満しやすい。

⇒ 肝の昇発が過度となり気機が逆乱失調し、脾胃の昇清・降濁に影響を及ぼして心窩部が膨満する。

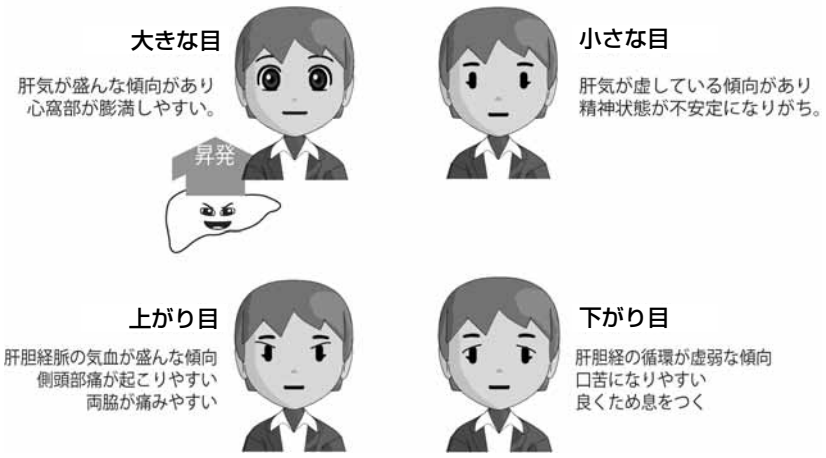

図 2-7　目の全体望診

ⓑ小さい目

肝気が虚する傾向があり、精神状態が不安定になりやすい。

⇒ 肝は魂を蔵し、疏泄と蔵血によって精神活動を調節することから、肝気が虚すると精神が不安定になりやすい。

ⓒ上がり目

肝胆経脈の気血が盛んな傾向があり、側頭部痛・脇痛が起こりやすい。

⇒ 肝胆経が盛んになりすぎると肝胆経の循行部位が痛む。

ⓓ下がり目

肝胆経の循環が虚弱な傾向にあり、口苦になりやすく、嘆息がよく出る。

⇒ 肝気が鬱するとため息が出て、胆汁の貯蔵と排泄に影響が及び胆汁が上溢すると口が苦くなる。

❷目の局所望診

目には五臓六腑の精気が注がれ、それぞれの状態が反映される。臨床の場で目を見つめ続けると予期せぬ誤解を生じる恐れがあるため、診断の意味を説明して観察するもしくは瞬時に判断できる技術を修得するように心がける。

ⓐ眼精（図 2-8a）

本来は最初に観察する項目であるが、目の部位の名称に関する説明が必要であったことから説明の場をここに移動した。

眼が有神であるとは、精彩がありキラキラしている健康な眼の状態のことで予後が良いことを示唆する。眼が無神であるとは、白珠（白目、結膜）が濁り、黒珠（黒目）がよどんで精彩がない眼の状態で、五臓六腑の精気が不足し、予後不良であることを示唆する。

ⓑ目の臓腑配当（五目部）（図 2-8b）

内眦（内眼角）と外眦（外眼角）は心、黒珠の瞳孔は腎、虹彩は腎と肝、白珠は肺、眼胞（眼瞼）は脾に属する。

眼眦が赤いのは心火、白珠が赤いのは肺火、眼胞が赤いのは脾火、黒珠がはれぼったいのは肝火、目が黄色いのは湿痰もしくは黄疸、目がどんよ

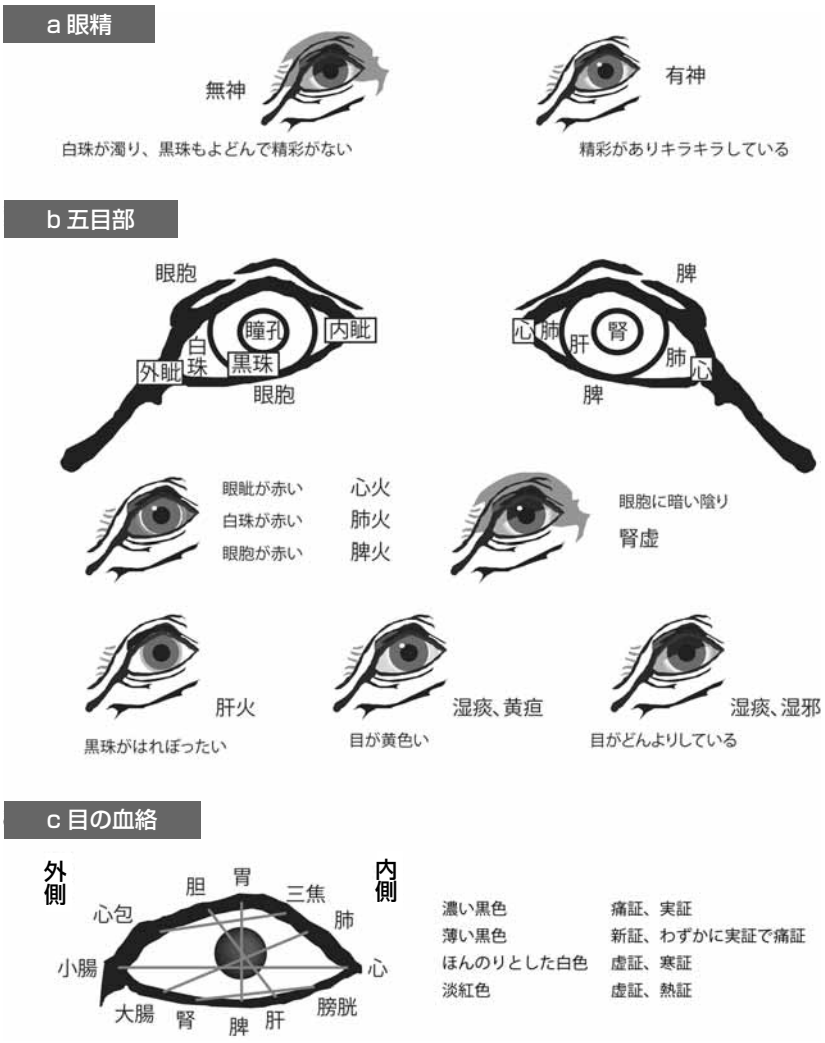

図 2-8　目の局所望診

りしているのは湿が存在し、眼胞の暗いかげりは腎虚による。

ⓒ目の血絡（けつらく）と臓腑配当（図 2-8c）

血絡の存在する部位で病変臓腑を推定し、血絡の色で状態を判断する。

あまり使われていない診断方法ではあるが、充血はよくみられる変化であることから、ここで紹介する。

血絡には方向の順・逆があり、それぞれ臓腑の表裏関係を持つ。内眦から外眦に向かう血絡が心、逆が小腸、内上方から外下方に向かう血絡が肺、逆が大腸、肺の上から外上方に向かう血絡が三焦、逆が心包、上から下に向かう血絡が胃、逆が脾、胃の外方から脾の外方に向かう血絡が胆、逆が肝、肝の内側から脾の外方に向かう血絡が膀胱、逆が腎である。

黒色の血絡は痛証や実証で現れやすく、色が濃くなるに従い病歴が長いことを示す。白色は虚証、寒証で現れ、淡紅色は虚証、熱証で現れる。

❸目の症状（図 2-9a）

ⓐ両目が乾き、目昏(ものがはっきり見えなくなるか、夜盲になる)

［八綱弁証］虚証、陰虚証。

［気血津液弁証］血虚証。

［臓腑弁証］肝血虚証、肝陰虚証、腎陰虚証。

［臓腑相関弁証］肝腎陰虚証。

⇒ 目は肝血に養われ、肝血が不足すると目の機能に障害が現れる。また、肝血と腎精は肝腎同源の関係にあり、肝血の不足は腎精の不足を招き、腎精の不足は肝血の不足を招く。

ⓑ目赤

［八綱弁証］熱証。

［臓腑弁証］肝火上炎証(実証)、肝陽上亢証(本虚標実)、心の機能失調。

⇒ 情志の失調で肝鬱化火となり肝火が頭目を上攻することや、肝腎の陰が不足して肝陽が亢盛となり上衝すると目が赤くなり、時に角膜が腫脹して痛む。また、上焦の陽臓である心の失調によって上焦に熱が偏ることも原因の一つである。

ⓒ目赤痒痛(瞼が赤く腫れ、痒みがある)

［八綱弁証］熱証。

［病因弁証］風熱病証。